

「E.FORUM スタンダード」の改訂に向けて(家庭科)

北原琢也(京都大学教育学部・非常勤講師)

1. 「E.FORUM スタンダード (家庭科) 第1次案の成果の概要

「E.FORUMスタンダード(家庭科)(2014年3月)」の第1次案(以下、第1次案)は、2008・2009年(平成20・21年)改訂小学校・中学校・高等学校学習指導要領家庭科及び家庭分野(以下、家庭科)の「目標」・「内容」を踏まえつつ、京都大学大学院教育学研究科E.FORUM「カリキュラム設計データベース(CDDB)」(会員限定サイト)からの引用、E.FORUMの参加者の実践事例や意見及び近年の「思考・判断・表現」の学力形成とその評価の文献に基づいて「本質的な問い」「永続的理解」「パフォーマンス課題」の例を提案した。

第1次案の成果として、筆者は次の2点を提示したい。1点目は、今後の家庭科教育は、単なる生活技能・技術教育といった知識や技能の習得だけではなく、よりよい生活を工夫・創造するため、体験や実践から習得した知識と技能を実生活に活用し、身近な生活から社会に繋がる課題を主体的に見付け、それらの課題を消費や環境などの視点から解決できる資質・能力及び態度を育むことを踏まえつつ、小・中・高等学校の家庭科「目標」の(後段)部分に着目し、家庭科の包括的な「本質的な問い」及び校種別の「本質的な問い」を提案できたことである。

2点目は、小学校家庭科の「内容」は、中学校家庭分野の「内容」との系統性、連続性、発展性を踏まえ、生涯にわたる家庭生活の基礎となる能力と実践的な態度を育成する観点から、中学校の内容構成と同じ枠組みとして4つの「内容」で構成された¹。高等学校家庭科は、共通教科として生徒の多様な能力・適性、興味・関心等に応じて選択して履修させることを重視し、3科目

のうち、いずれか1科目を必修科目として履修することとされた²。第1次案では、包括的な「本質的な問い」を意識しながら、各校種の特徴や系統性・連続性・発展性を活かしながら、それぞれの「内容」の「本質的な問い」、それに関連する題材の「本質的な問い」「永続的理解」「パフォーマンス課題」を提案できたことである。

2. 「E.FORUM スタンダード (家庭科)」第1次案の課題と改訂案

(1) 家庭科の中心的概念

学校教育の正課の一端を担う家庭科は、人間教育の理念と整合する教科独自の背景にある家庭教育(学問)の中心的概念、体系的概念、探究的な学習を通じた課題解決の方法などを明確化・可視化し、歴史的・社会的・文化的な文脈において、家庭科の中核となる概念を活用して、自ら課題を発見し、その課題を解決していく資質・能力、態度まで発展することが重要であると考える。

マジョリーM.ブラウンは、家政学において「その専門職としての奉仕と知識の基礎が、家族³を中心とする人間についての関心事から発生しており、家族及び家族の一員としての個人の幸福を志向して家族の問題の解決を援助する分野である」と結論づけている。そこで、そのような背景をもつ家庭科教育の対象領域を「家族を中心とする人間生活」とし、家庭科教育の概念体系を家族を鍵概念として構想している⁴。また、ティーン・ガイドでは、家族の事象・出来事に関する学習を通して、家族関係の理論を児童・生徒に発見させ、習得した理論を用いて自分と家族との関係「なぜ、家族とのかかわりを考え

生活を営む必要があるのか」を理解し、説明する力を育成しようとしている⁵。

以下、「家族とは何か」「なぜ、家族とのかかわりを考え生活を営む必要があるのか」の概念を参考に課題と改訂案を提案していきたい。

(2) 包括的な「本質的な問い」及び校種別の「本質的な問い」の課題と改訂案

小学校学習指導要領解説家庭科では、「家庭生活を総合的にとらえる視点から、家族の生活と関連させながら衣食住などの内容を取り扱うよう題材を構成すること」⁶、また、中学校学習指導要領解説家庭分野では、「学習を体系的に行う視点から、内容のAの(1)「自分の成長と家族」に小学校家庭科の学習を踏まえた家庭分野のガイダンス的な内容を設定し、3学年間の学習の見通しをもたせるために、第1学年の最初に履修させることとしている⁷と解説されている。つまり、家庭科の「内容」は、「家族・家庭」を中心とし、「衣・食・住生活」を周辺課程として位置付けたカリキュラムだと言うことができる。

第1次案の包括的な「本質的な問い」で提案した「どうすれば、生涯を通じてより望ましい生活を創造することができるのか」は、個人と家族が時間的・空間的な基軸を越えて直面するという本質的・永続的な意味合いの含意が弱いと考えている。そこで改訂案として、「生涯を通じて、家族の幸福の実現に向けて、より望ましい人間の生活をどうすれば創造することができるのか」を提案したい。

校種別の「本質的な問い」は、改訂案の包括的な「本質的な問い」を意識しながら、小学校家庭科の「本質的な問い」は、「家族と健やかに生活するためには、私や家族はどのような生活を営むことが必要か」、中学校家庭科の「本質的な問い」は、「家族を中心とする生活を考え、生活を自立的に営むとはどのようなことか」、高等学校家庭科の「本質的な問い」は、「家族

を中心とする生活を考え、より望ましい生活を創造するとはどのようなことか」を改訂案として提案したい。

(3) 「内容」の「本質的な問い」の課題と改訂案

2008年(平成20年)中央教育審議会(答申)では、家庭科の改善の方針として「自己と家庭、家庭と社会とのつながりを重視し、生涯の見通しをもって、よりよい生活を送るための能力と実践的な態度の育成」⁸が掲げられている。この文章の前半部分「自己と家庭、家庭と社会とのつながりを重視し、生涯の見通しをもって」は、時間を越えて連続し、世代を越えて繰り返される人類共通の本質的・普遍的な問題としてより広範囲におよんだ領域を示唆していると言える。そのために、環境問題、消費者教育、食育、福祉・高齢者問題、情報化問題、国際化問題、男女共同参加社会などは、家庭科のそれぞれの「内容」を扱いながら、個人と家族にとってより望ましい生活の創造の視点から、歴史的・社会的・文化的な影響を考慮し、解決していく課題といえる。

一方、後半部分は、学習した知識と技術などを活用し、これからの生活を展望する能力と実践的な態度を育むことの必要性から、(2008年)中学校学習指導要領解説技術・家庭科(家庭分野)では、「生活の課題と実践」に関する指導事項を設定し、家族・家庭や衣食住の学習に関心をもち、生活の課題を主体的にとらえ、実践を通してその解決を目指すことにより、生活を工夫し創造する能力や実践的な態度を育てることをねらいとされている⁹。

家庭科における課題(問題)解決的な学習は、意思決定が必ず要求される場合と関係し、価値判断し、選択し、状況に応じた最適解における実践的行為の結果が問われるような課題である。このような場合、空間的・時間的により広範囲におよんだ領域を踏まえ、長期的な結果を

見据えた条件下で価値判断し、選択し、意思決定することが要求される。そのため、児童・生徒が実社会・実生活の文脈における課題(問題)を解決するために必要な家庭科の本質に関わる家庭科ならではの、ものの見方・考え方・感じ方、処理や表現の方法などの資質・能力を育てるのが何よりも大切であると考え。

そこで、各校種の特徴及び系統性・連続性・発展性を踏まえながら、それぞれの「内容」の「本質的な問い」として、例えば、家族を中心とする生活を考えることを共通にして、「適切な意思決定とはどのようなことか」、「この課題(問題)を解決するにはどうすればよいか」、「私や家族はどのような生活を営むべきか」などの本質を問うことを提案したい。

おわりに

家庭科では、(2008年)中央教育審議会(答申)の改善の具体的事項において「(ウ)技術に関する教育を体系的に行う視点から、小学校での学習を踏まえた中学校での学習のガイダンス的な内容を設定するとともに、他教科等との関連を明確にし、連携を図る」¹⁰と記述されている。

具体的には、2008年(平成20年)小学校学習指導要領解説家庭編を例にとると、「B 日常の食事と調理の基礎」では、「理科、体育科などの教科や学校給食等との関連を考慮するとともに、中学校技術・家庭科との円滑な接続のために、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るように配慮する」、(1)の「A 食事の役割を知り、日常の食事の大切さに気付くこと」の項目において、「この学習では、体育科で学習した内容と結び付けて、健康や成長面から食事の役割について気付かせる活動も考えられる」、(2)の「A 体に必要な栄養素の種類と働きについて知ること」の項目においては、「この学習では、理科の第5学年における植物の種子の中の養分に関する学習で扱うでんぷんとの関連を図り、

でんぷんは炭水化物の1つであることに触れることも考えられる」¹¹という記載がある。

「C 快適な衣服と住まい」では、(2)の「イ 季節の変化に合わせた生活の大切さが分かり、快適な住まい方を工夫できること」の項目において、「C (2)イの学習の展開に当たっては、理科の第3学年、第4学年における日なたと日陰、空気と温度に関する学習内容や、体育科の第3学年及び第4学年における健康によい生活に関する学習内容との関連を図るように配慮する」¹²という記載がある。

「D 身近な消費生活と環境」では、「社会科や理科などの教科や総合的な学習の時間との関連を考慮するとともに、中学校技術・家庭科との円滑な接続のために、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るように配慮する」¹³という記載がある。

しかし、「論点整理」¹⁴では、「教科等を横断する汎用的なスキル(コンピテンシー)等に関わるもの」、「教科等の本質に関わるもの(教科等ならではの見方・考え方など)」、「教科等に固有の知識や個別スキルに関するもの」については、相互のつながりを意識しつつ扱うことが重要と述べている。「論点整理」を踏まえると、例えば、(2008年度)小学校学習指導要領の理科では、各学年で重点的に指導する問題解決の能力を「比較(3年)」「関係付け(4年)」「条件制御(5年)」「推論(6年)」といった記述の形で示すことにより、事実に知識以上に概念的知識への注目を促す工夫がなされている¹⁵。つまり、家庭科で身に付けるべき資質・能力は、教科の「目的」や「目標」としてだけでなく、現実の社会・生活の文脈に即した場面において使いこなす手段として捉えることが大切だと考える。これらの資質・能力を上手く使いこなすためには、使って初めて育成されること(例:車を運転する資質・能力の上達は、実際の路上を運転しないと身に付かない)及びそれらを働

かせて学ぶための家庭科の「内容」における学習活動の創意工夫が必要である。また、評価問題としてのパフォーマンス課題が現実の社会・生活に即したものになっていることは、そのこと自体が評価しようとしている学力観を暗示し、児童・生徒の学びへの姿勢を方向づけることになる。このような考え方で編成される教育課程や学びの変革としての授業改革は、創意工夫、改善された授業が育む本物の学力を把握するためだけでなく、そうした本物の学力を形成するためにも、教育評価の問い直しにまで変革しなければならない¹⁶と考える。

筆者は、今後、現実の社会・生活の文脈に即し、家庭科の固有の知識や技能と資質・能力の両者を結合（融合）した学習活動を考え、「総合的な学習の時間」との連携を図ることにより大いに期待できるのではないかと考えている。

＜参考文献＞及び＜注＞

- ¹ 文部科学省『小学校学習指導要領解説家庭科編』東洋館出版社、2008年、p.14
- ² 文部科学省『高等学校学習指導要領解説家庭編』2009年、p.4、<http://www.mext.go.jp/>
- ³ 「ブラウンのいう家族は、社会を構成する単位として規定されているにすぎず、いわゆる血縁とか婚姻による閉鎖的な近代家族を意味するものではない。ブラウンは、家族を自己形成および社会形成に貢献する変化の担い手として概念化している。」林未和子「ブラウンの家庭科教育理論の構成概念に関する一考察」、広島大学大学院教育学研究科、p.66、
- ⁴ 林未和子「ブラウンの家庭科教育理論の構成概念に関する一考察」、広島大学大学院教育学研究科、p.66、ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/.../J-HiroshimaUniv-CurriResDevAssoc_9_63.pdf
- ⁵ 佐藤園「家庭科の本質（第2報）」『ティーン・ガイド（第6版）』における家庭的資質育成教育一、日本家庭科教育学会誌、2001年、p.20
- ⁶ 文部科学省『小学校学習指導要領解説家庭科編』東洋館出版社、2008年、p.5
- ⁷ 文部科学省『中学校学習指導要領解説家庭分野』教育図書、2008年、p.41
- ⁸ 中央教育審議会（答申）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（平成20年1月17日）、pp.101-102、<http://www.mext.go.jp/>
- ⁹ 文部科学省『中学校学習指導要領解説家庭分野』教育図書、2008年、p.41
- ¹⁰ 中央教育審議会（答申）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善に

ついて」（平成20年1月17日）、pp.103-104

¹¹ 文部科学省『中学校学習指導要領解説家庭分野』教育図書、2008年、pp.25-28

¹² 同上、p.37、p.43

¹³ 同上、p.49

¹⁴ 文部科学省『育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—』（2014年3月31日）

¹⁵ 石井英真『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影—』、日本標準ブックレット№14、2015年2月、pp.31-33

¹⁶ 同上、p.65